

## 第44回 日本カトリック映画賞 授賞式

日時：2020年7月4日 13:30～14:00

場所：カトリック浅草教会

司会：土屋 至（SIGNIS JAPAN 会長）



土屋：こんにちは。ただいまより、第44回日本カトリック映画賞の授賞式を行います。

SIGNIS JAPAN、カトリックメディア協議会は、毎年、日本カトリック映画賞を選定しております。従来ならば、6月6日に、なかのZEROホールで、だいたい1,000人の聴衆を前に、授賞式と上映会をやることになっておりましたが、今回は、このコロナ騒ぎのおかげで、わたしたちはこういう形で、現在カトリック浅草教会において、こじんまりと授賞式を行うことになりました。わたしたちはもうすでにこういうチラシまで作って、これをまく体制のところまで行っていたんですけど、残念ながら、これをまくチャンスにはいたりませんでした。

では、最初に、このカトリック映画賞、今年は、『こどもしょくどう』、日向寺太郎監督の『こどもしょくどう』に授賞が決まりました。その授賞理由を、晴佐久神父さんの方から説明していただきます。晴佐久神父様、よろしくお願いいたします。

晴佐久神父：晴佐久神父です。毎年、いろんな映画を選びますがけれども、今年、この『こどもしょくどう』、ぜひ、日本カトリック映画賞を差し上げたいと、そう思った一番の理由のひとつに、映画のいちシーンがあります。それはチラシにも書きましたけれども、主人公のユウト君が貧しい子どもたちと出会って、どうしたらいいものかねえ～って、いろいろ思いめぐらしているときに、ふと自分が食べている我が家の食事を見るシーンがあるんですね。“カツ”。その子どもがジーツとその“カツ”を見る、その“カツ”の映像が映るわけですけど、これ、自分も何度も体験したこと、自分はこんなおいしいもの食べて、こんなに安心した暮らしをしていて、でも、それが無い人もいる。なんとかしてあげたいけれども、自分の“カツ”をあげるというところまでは、いかないな～。でも、分けてあげたら喜ぶだろうな～、でもそんなことをするのはおかしいかな～、迷惑じゃないかな～。いろんな思いが渦巻く中で、でもこれを持って行こうって決心する瞬間があるわけですよ。

まあ、大人は普通やらない、でも、子どもは、なんか、ある意味神の国の住人でもありますから、まっすぐにそれを届けに行く。まあ、すぐにというか、それでもまだ迷ったり、いろんな思いがあるんだろうけれども実際に動く。この瞬間がこの世界に満ち満ちれば、世界は突然神の国に変わる。立派な行政の働きとか、あるいは市民団体の奉仕とか、それも必要だけれども、一番はこのわたしがいただいた恵みを分かち合えば、それで、みんながそうすれば、それで世界は突然神の国に変わる、あたりまえのこと。みんながせーのでやるから、ほんとに明日にも神の国は実現する。ただそれができないでいるわれわれに、この映画はまっすぐに語りかけてきました。ユウト君のまなざしで。こんな美しい映画を見させられて、自分の中にも、子ども時代には持っていたのに、いつのまにかだんだん、いろんな垢やらドロやらがくっついて、カピカピになっちゃっている心を、もう一度、みずみずしく洗い流してくれたような、そんな感動があって、とても励まされました。そうだね、と。みんなで作っていきましょうよ、と。

およそ映画というものは娯楽ではありますけれども、この世界を本当によいものに変えていく、そのような力を秘めているものってあるはずですし、また作り手だって、ただ消費されて終わっていいものじゃない、何か人々の心に残ってみんながしあわせになる、そのひとつの力になれば、そう思って作っているわけですし、作り手の思いがまっすぐにこの心に届いて、実際、そのようなこと、このコロナの時代に、わたしも始めておりますが、そんなひとつのきっかけになったと思っております。特に、この授賞を決めたときは、まだコロナのことなんて夢にも思っておりませんでしたけれども、実際にこういう時代になってみると、今、まさに必要なのが、このユウトのまなざしなんじゃないかと。大人たちは、<sup>かね</sup>金の話ばかり、責任の所在の話ばかり、いままでのものをもう一度元に戻すって話ばかりで、ちっとも、本当に助けを必要としている一人ひとりの思いに寄り添わない。そこに届けない、ともに生きていこうとしない、ましてや分かち合わない。

コロナの時代、これからもコロナは終わって、また第2 コロナ、第3 コロナ、超新型コロナウイルス、いろんなものがこの世界を席卷することでしょう。今、この時代に何が一番大事かということ、本当に考えさせられているこの時期に、この『こどもしょくどう』に応援の賞を差し上げることができるのは、わたしたちの誇りであります。受けてくださった監督にも感謝いたしますし、また、ドラマの中のこととはいえ、自分の“カツ”を、橋の下の食べることのできない子どもたちのところに届けに行った、その思いに、この賞を差し上げたいと思います。

土屋：晴佐久神父様、どうも、ありがとうございました。では、続いて授賞式に移ります。まず、表彰状を差し上げたいと思いますので、日向寺監督、どうぞ、こちらへ。

土屋：表彰状。日本カトリック映画賞、日向寺太郎殿。あなたが監督なさった『こどもしょくどう』は、こどもの貧困問題や親の育児放棄問題など、子どもの身になり、子どもの視点で描くことで大人の世界の本質を見つめた大変すぐれた作品です。血縁ではない人とも、一緒に食事を重ねることで互いに助け合う真の家族が生まれていく物語が、孤立した現代社会を救う福音的メッセージであるこの作品の意義には、まことに大きなものがあります。よって、ここに、日本カトリック映画賞を授与します。2020年7月4日、SIGNIS JAPAN カトリックメディア協議会会長 土屋至。

日向寺監督：ありがとうございます。

拍手

土屋：続いて、トロフィーを贈呈いたします。  
おめでとうございます。

日向寺監督：ありがとうございます。

拍手

土屋：続いて、花束の贈呈に移ります。

日向寺監督：ありがとうございます。

拍手



土屋：では、日向寺太郎監督から、ごあいさつをいただきます。

日向寺監督：ご紹介いただきました日向寺と申します。晴佐久神父のすばらしいお言葉の後に、わたしのようなつたないあいさつをおゆるしいただければというふうに思います。44回を迎えられる歴史を持ち、そうそうたる映画が過去に授賞されている日本カトリック映画賞を『こどもしょくどう』がいただけるのを、とてもうれしくありがたく思います。ご存じのように、映画は多くのスタッフとキャストで作られるものですので、スタッフ、キャストを代表して、わたくしが拝受したものというふうに思っております。

わたしは特定の宗教を信仰しておりませんが、祈りという行為に、とても心を動かされます。それはおそらく、心という見えないものが見える姿・形になったというふうに、わたしには思えるからです。本来は、観客の方々の前で映画を上映してこの授賞式が行われるはずで、それがコロナウィルスの影響でなくなってしまったわけですが、こういう形になったわけですが、当初はそれをととても残念に思っておりました。しかし、人と人を分断させようとするコロナウィルスと、人と人のつながりに可能性を見いだそうとするこの映画が、同じ年にあるというのも、何かのめぐりあわせだろうというふうに今は考えるようになりました。最後になりますけれども、この映画はフィクションですが、実際に「子ども食堂」というのは全国にあります。その子ども食堂を運営されている方々に敬意を表してあいさつとさせていただきます。どうも、ありがとうございました。

拍手

土屋：最後に写真を。

カシャ



映像は、ここまで\*\*\*\*\*

土屋：ありがとうございました。続いて、場所を変えて対談が行われますので、そちらの方も楽しみください。

以上